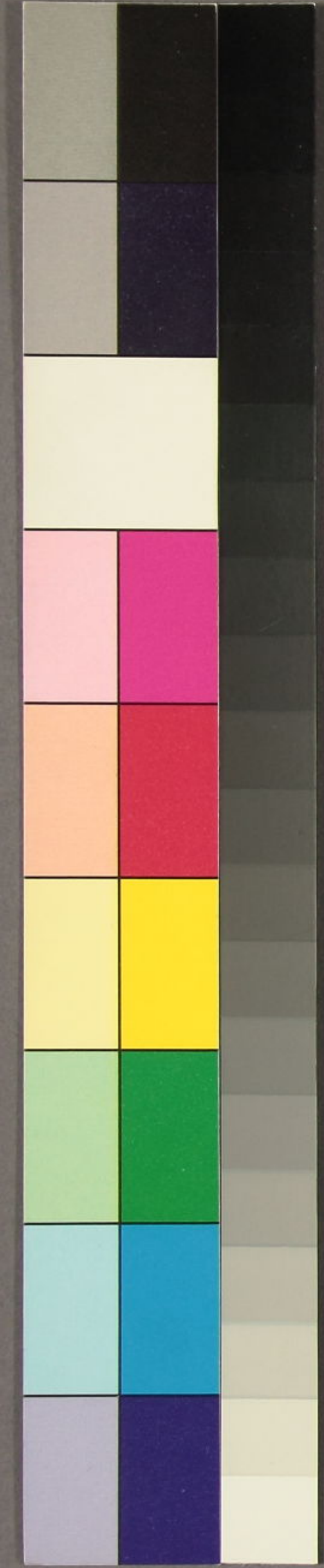


十訓抄

自五
至七



十訓抄中

第五可撰朋友事

第六可存忠直事

第七可專忠直事



第五可撰朋友事

成人云人若善友ありん事と云ふ福子つさ也
麻のそりの遠ハをあるりよ自らあしとさすあり
遠ハ枝さくまうぬ草なりさきとも麻はまじり
ぬきハゆりさくりハ道のねきまいた心なうす
うらりく生のわり也心のあし人なきともうらり
くらりある人の中よりぬれハはたかたれあささる
はくし自らあしとさす心より信はた友ありん事

後より詠を文よもすめり頼氏の家訓よ

興善人飛如入芝蘭之室久而自芳也

与惡人飛如入鮑魚之肆久而自臭也

とまると又或文よ人の心氷の入物も随ひて入物

ほそちれぬ物なりと曰ふれぬ心ハ朋友よ

ありふ何と不可撰と書り又九条殿遺誡ハ高

色恵相の人よ伴ふ事おくれぬ人おれぬかかれ

力ねくうらかろくつむむなり共よく其人を撰ぬ

菫菫思と異よすなりと也花のりともま汁とらり

月の赤よ二粒依りたりなると格ありさくひもす

かこく思むめりるりの也すんともあとかろく

陰り心なりと故徳とす常心ありん人よあ可休

芝蘭の修一人の翁竹林の菴一七賢類をそ

おりり一と友なりけり子然に雪の夜月よあくら

遠く剡縣の安道と名け劉愨清凡朗月よ玄夜の

ちと本以修にけり誠よゆめをよ友りねりひま

いりねり曲高も地うくねりめくれなり梁の孝王鄒枚

とやと一ににるるも一と兎園の遊ともうめ

魯の仲尼ハ子路と云一おりり一と弟ありととれ

ほよこちよすめけり物よもすそけりけり法非ず九

の皇子貞貞親王の作終るける

鄒枚散後平臺靜 空遠春風只斷腸

文選卷二十一魏文帝与吴质書云

昔伯牙绝弦於鐘期仲尼覆醢於子路知音

ひ〜とまのこ

④楞嚴流の惠心僧都と園城寺慶祚河因禰平遷化と可
若也其く年月と送けりて其祚後秋の行ひんて縁
とかく同伽と供治ある間之より芳き句ひありて出する
色して

我是極樂久住菩薩 化依已盡還生極樂

くヤカちあうりあや一貴く思ふ横川乃僧都のりく業
内〜まり供仰りて僧都此脱失治〜り〜り

⑤興福寺の智光親光一雙の貴き人〜一所〜字同
てもちる〜親光前〜だれ〜り智光共せ所と〜ん〜ん
〜尊〜仲〜極〜あ〜ま〜て親光り思ふ〜ん〜ん
ち〜り〜ま〜共極と修〜書〜ら〜と〜智光〜累〜施〜羅〜と

世〜修〜を〜り

⑥中山と信〜り〜ける人宰相成頼と〜〜常〜も〜修
友〜り〜け〜ら〜宰相縁〜道心慈〜〜と〜家〜〜と〜り
筆痕せ〜と〜り〜ける所〜〜〜外記ある〜書者の物
心持〜り〜と〜信〜と〜出家の家〜〜と〜や〜り〜ゆ〜と〜か
栢の宿舎と〜り〜〜と〜〜と〜り〜り〜て中山の方〜と〜り
のふ〜〜〜〜只其〜〜〜る房室と作ま〜〜と〜信〜と〜家
〜と〜ら〜〜〜信〜け〜ら〜宰相入道の詩〜〜と〜り〜使
修〜り〜し〜筆〜と〜〜と〜〜と〜り〜た〜れ〜あ〜や〜と〜思〜と〜也
せ〜ら〜り〜ゆ〜せ〜る事〜ふ〜と〜て是あ〜と〜て思〜ら〜れ〜と〜り
〜と〜り〜る〜の〜り障子の〜と〜〜と〜て〜と〜り〜あ〜れ〜り〜も〜り
ゆ〜〜共他と入道〜〜と〜り〜り〜あ〜と〜と〜生の大けい山の

てあうらありあまのいふすくもあれい妻をのこすは
と福いあまもろくぬへ〜次うまよいらあみ紙ゆきす
かす心とろくぬへ〜ゆり唐の梁伯鸞妻孟光とし
形扱め〜んく〜りけと〜女あ〜は〜入道二心
ねりりり夫世と道く霸凌い入ける財もつ〜た
家の貧をもあつ〜す姉の礼まもめんらなり
よりそ志深りりり誠〜共安西施南威とろりた
夫とろり〜め外心あ〜ん〜りてあ〜何の
益あ〜ん素中吟と云よ

富家女易嫁 嫁早輕其丈
貧家女難嫁 嫁晚孝於姑
ね〜あ〜い〜〜〜候と〜も夫のまめけい〜り〜む

女〜〜〜す〜〜妻と定り半法令の〜〜あり

④ 淳和帝の沙代桓武天皇の子夏野大尾右大臣高直の皇子弟〜律令とぬ〜定り

ろ〜財男女は振舞と分り〜〜〜妻と不共
三月可去道士あり共〜〜〜男の父母は〜〜
池の財文信た〜娘た悲めり女〜〜貪賤の財は〜
富家と〜可去也〜〜父母生り財濟女と〜父母
死て存ねま〜〜〜也其七と云〜
男の父母の〜〜横なり妻二〜〜間夫〜〜妻と〜
〜〜妻は〜〜物物〜〜妻の〜〜盗する妻〜
〜〜妻其未終ん半と可悲也七〜〜病あり
妻也此七の夫〜〜ん〜〜〜他を〜
きり終り〜〜〜又君〜〜〜撰は又君と可

まゝすゝさゝののなきいゝと一筋あそくをわくゝいゝあゝす
これに大和物原の武蔵守なる人の娘河尻原の女房とて
いけりやうこむにらきううなるも人そ人あまゝいけさ
うあぢれたまをいひせし思あうりせりけりと平中
あぢららよまぢれにあひけりやうと思ひすまう
まぢれにちぢぢけりといひあゝいひや一筋とぢ
人うゝもあゝいゝてわくゝなんゝらあゝふ事と使人の
いひとぢとていゝ心うりちぢぢん原をなうてあゝ
のまれとぢつゝそとあゝのいゝかゝとて此年とて
あゝいけり

あまう川をなす物とあゝいゝとらう月の糸の流りあり
あゝいゝ女うゝすゝとあゝいゝとらうあゝのいゝとあゝすゝゝす

いゝとあゝのいゝとあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと
もあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと

④唐國の齊國王の女は若癩と云く賤民の娘也即ち
行て素と取けりといふ王持し出せ給けり素のいゝと
て其の行者と一月をいゝとらうあゝいゝとあゝいゝと
同治は秋あやの命より素と取らう也ゆを
るらういゝとらうあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと
ゆのいゝとらうあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと
ゆて又あゝいゝとあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと
中ありわくゝいゝとあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと
あゝいゝとあゝいゝとあゝいゝとあゝいゝと

いゝと癩の類よまぢれは若癩とまけりゝと

⑤ 阜王孫の母は阜文君と云ふ一人家富たれども其
 を厭ふて嫁りけりと妾人よすくもきりたり眉を山
 としつゝ胸に取らうみけり時、目馬相如く云けり
 男は貪りもれたるあり琴をもよみひきたり
 文君是よりして後男ありひきけりと又母のいふは
 まを相如く貪家ありて世とわたりる又文君の母を
 あつてけり母と相如く世はしく文君今成てい
 ろりもれたる天孫の答ありてなり是より道おれ
 と一節、邪定惟喬親王聽深琴詩云
 相如者拙文君侍 莫使為中子納聽
 或文云妻ハ厨也云心ハ一人より下庶人ハ印りまて又
 の心ハひきりたり母也其心若宿く時ハ家むくふりて

若妻又の中ハ悪事と云ふある者事とハ亦
 すりて此世ハ家と治る法と礼後世ハ道とす
 けり若知識なり

⑥ 唐ハ陶谷あり云者あり一二年の内ハ家大なる
 あり人あり其妻とありていふて泣きたり妹大不
 怒と此と云ハ書きて云家閑社中と云ありと嬰
 啼とす切をて留りと積珠と云楚の令尹叔敖家
 貧して困窮あり福子治純名と後代ありりき
 令其子無徳無功と留業あり事後者とありり
 きる也一親中南山と志約あり七月雨露わかれくと
 のう衣毛もわかれんと惜てあへく食物と求む心志
 たり此れもや衣たりて寒とありり馬とありりて

三ノ心忠善宰相弟伝言

藏上人兼平仁年四月十六日より其の寄る巻にて
ひけりゆき六月一日午刻斗は始死して終て同十三
日未とよりわたりきりける其間夢にもあらず現にも
あらずして金剛藏王の善巧方便にて三界の凡
人ぬれ多く経典りけるやとては帝の御意ありと
けり多り此の鐵少とて相違事各は五文計其申
二一の芥屋あり帝是よりわたりし上人と御説
て候ひて遠く相違とせ給て我日本國金剛藏大王
の子也徳而在位の時五乃重罪あり此一宗の管束の
大臣の事よりより候よ此鐵客の若くは病てわたり
若くは交事年久しくかきりて候作あり候と
思ひたすより候よ善根の候とハ主と國母の介

中とて御意傳はるありと臣共々希ら灰のくさう
つとより候よと帝討は御衣とてとくくそのころに
とらたり者悲泣嗚咽して半好ありきすと
人は時衆と知られ候運よ貴賤とを論罪候
きと辛くす可致とて帝作られあり上人涙を
流して彼屋の外へおられ候山一は殿より候ん
平藏 御子其が親とす
高岳親王の

いふ形とてなるとくの度入ぬ候なりとすまらあり
とより候よと十義万葉のまねとてとてと
きとぬあひかあり候と上人此をと奏してたれは
候子候大臣共御意ありとて候と訪ひ
うせたり此は後世とて御意深候也

第六 可存忠直事

或人云孔子の語つる事有偏君に隨ふ也といふ
偏親の如き孝ありすありしや一は時諍ひ遊る時
隨是と忠孝とを併し之を兼ふもあれ天か親類と
とあれ知者朋友とをもあれ忠とん事といひありし
いさむつとく思ふたせの未だ此事一は外人の言を
思ふ事あり事といひありしは心なきこといひし事あり
心付くやうにも覺れは天道は私たおのすうめとま
人の忠事をいひしはりのの徳とあり事ありしは
けそする事ありしは徳も成く用も思ひありしは
其人のよきまつ物といひ忠念をたみ心の門方よけ
忠事の事ありしは徳ありしは又いひし事ありしは

事とさうせしと思也これはいと愚なる事なれば
皆人のちひさるれいさうくあうす又心つさめぬ
ゆゑさうさふさふ也すんく人の腹まう耐さるく割
すきはいちいさう盛なりたよサ水とちんその益
かりるるゆゑゆん機始とさうりて初ふいさびた
君と愚るりた賈に相助け共國なりさす親
と一也これりた君子つしとて政り共家合るる
重物をさした舟よのせつれいめ不況と下いささ
らしくはけくそのめせん人のいささゆめくうら
めささくさうさうのささしと也強とていま
と冥かと可思れ也徹す結のふの治さうりすと
ねらうゆめりれくやうとねり何曾さ晋の政の
これりと練すしと家ゆりてしとさうことさげら
あをゆめりさうとさうさくゆつしと計とて彼國の
はよあさうさ事とさうさうさう

⑥楚襄王晋の國とうきんさう強敵是と練し
園の松のうと蟬病と飲さす後と蟬病のあはむと
すうとあか蟬娘又蟬とあさく後と蒼雀のれ
らかりとあか蒼雀又蟬病とあさく松のあはむ
らうとゆめり童子れさうとあか童子又蒼雀との
すくさく深谷法とさう松のあはむとあか
身とあはむと此皆前と利とのさうひて後の者
と不願ゆ也とせり王世河ゆめりと同く晋と責
と事留ゆぬ但周文王殷付とせしとあか

あましくは國へ向ふ時流竹の子を流理とて諱を
きししつんを品望うとてひひ付くとすまり流りさり
き是ハ紅の心也とわたりよりとて國是ととむく間
天授人ふの耐るれと後害の障ありとて也
⑤晋文公の父獻公のつわりふとて他國へ物を流け
る小途中うとて夜中して行かふ方とてうとてり外も推
此をたみけく股の内とてわく信するやうとてわ付とて
適て流る逐る獻公の流とてはあり

⑥漢昭昭儀ハ元帝の時時の家也國とてあて朝流ける
徳とをわけて帝のしをたうとてすもなかりけり昭儀
是とて世のつく所とてはきりあれた徳とてまりありけり
左衣より人未とてぬとてり帝昭儀とて同流昭儀

徳歎ハ人と得とてすも守故とて君とて近付たり平とてあ
つれあてりともとてしけるあてとてあてとてありとて
思ふ流りけりとて流紙宗良の帝の時流流の地とて
をちとて宗女とてりともとて思とて心とて思入とてあり
少くは流流とてわたりとてり

⑦仁徳の皇子
藤中天皇の皇子とて皇子の時流流の佳者仲皇子のそめ
う武とて流とて太子の部族の家とてわたりとて太子則
解とてりとて流平とて知流す時とて流流平那の流流
本流流下とて人の忠とてとてしとてふとてあて此事とてや
つた流流とて流りけり既とて流流ありとてけりとて馬とてあけ
のせとてとて流りけりとて途とて大流流多庭北野とて
流とてあてりけりとてとて流流とて皇子の軍の流流とてハ

中よりとりて取網より内表後亡の好也なりと天子石上の意より
物終りて終りて仲皇子とて帝位に以て終り

澹泊齋安積覺曰。襄三十年。鄭伯有嗜酒。子皙以
駟氏之甲伐而焚之。伯有奔雍梁。醒而後知之。遂
奔許。履中帝之為皇太子也。住吉仲皇子舉兵
襲之。太子醉而寢。左右扶掖上馬而走。仲皇子焚
宮。火通夕不滅。太子至河内。埴生坂而醒。其事殆
與伯有相類。唐李克用上源驛之變。亦此比而非
得大雨震電之助。則克用幾不能免。周公作酒誥。
衛武公戒耽樂。匹夫酌酒。必至喪軀。醉瞶之過。可
不警哉。湖亭涉筆見直道贊焉

◎左伝白壁。呂子孫之乃考ハかり。一也。其ツサ乃介トシ位リ耶

終りて終りけり。百河の宰相より。志終りけり。
あれ。此事と終りて等々の梵天帝秋の百條とつり
まら。と終り。初より終り。一也。相遠帝位に在り。桓武天皇
と中より。此條と事置の寺今の梵秋也。これ終り。此も
と終り。た皆終り。助より終り。す。一也。志終り。と云者。君のまら。を
揚ぐ。命とつり。一也。

藤武ハ麒麟岡の印也。塞垣より。一也。十九年。一也。漢
乃節と夫より。鄭伯ハ為孫回の使者也。胡地ハ。一也。
二千里。更。一也。單于。一也。終り。一也。禁於朝。一也。荆。一也。野。一也。
備。一也。紀。一也。信。一也。沛。一也。云。一也。終り。一也。終り。一也。終り。一也。
命ハ。一也。終り。一也。終り。一也。終り。一也。

直道。一也。終り。一也。百河の事。一也。水。一也。流。一也。一也。終り。一也。終り。一也。

とらさうけりかひしんさうひんさうぬあきよき嘉八年
正月よまたはねの趣く永年五年上座の時常先と
崩仰の旨件序云貫之社在歸日將以上獻橋山乃晚松
愁雲之影已結湘濱秋行悲風之色忽幽侍執之烟管
忽以莞逝

さうけりも彼徒毛理心の中...とさうけりぬ道世
くさなすねと上代の人の心と思ふかたの流りけり

◎良峯宗貞は深身天皇の近臣也病人頭成りけり
ゆ門よとられぬとされやうと頭ありてさうけりぬとさう
けりありきさうけりぬと書ありありありありありありあり
りれず清水をい小町よあやめをさうけりぬとさうけりぬと
乃年一ゆ門のゆとその日ありてぬと人をゆけぬ

んと河原よおさうけりぬ

とら人の死乃あり成ぬ也若のなよのらまうとせよ
とらけりぬの葉よ書くあやさうけりぬとさうけりぬと
さうけりぬとさうけりぬとさうけりぬとさうけりぬと
はとらけりぬとさうけりぬとさうけりぬとさうけりぬと
死ゆ僧西通僧とさうけりぬ

◎橋良利は寛平法皇の世と通きとせ給時回家とあて寛
蓮大徳とて遊行の由傳ふにけり和泉國日根と云わたり
とさうけりぬ

死のなきひ給の葉よと月々の傳やすらんよとさうけりぬ
因融阮法皇うせよとせ給と紫野よ葬送とさうけりぬと
此の事と子日せ給と事なきと思ふて行成ゆかると

うき

とこれ一は経のし年あつてと推しうらぬ縁を以て
お家とていふ事なれは男入らる心一いつと清くえ

◎北山院西村中納言義懐の外戚権左中将惟成は内氏
よととありて天下の権とともりゆりて帝ひさう内
表とて北山の幸り也とてて與人也く糸上の而も帝
正は江蘇をり惟成印とてとより又義懐が清く云外
感うしく重くありつるよ外人とゆりてとて又よ世よ
交うんえうりつるよ一早くお家す但しに義懐此
ゆとゆとて同お家す人の教訓とてあされいふと討の
人あつけりて始終ありてて成をよけよまればける
己一人とてそれのありお里よ心きうこのさるまうか

惟成はよ、賀茂祭日とて河のおく一糸と結とてよりけを
りてと此帝世とて宵とせはふおうりつと糸よか一少野
宮友の如女江藤殿おけとてゆめつりせはけりて清く
ゆ志清りけりてとこれとせはてゆかあさうすよの
さう心ゆとておのりゆけは果向因白のまゝとゆと人を
知人年ゆとゆけりてや一病よ

妻子珍寶及王位 臨命決時不随者

云文と書とてわとてきりりりてとゆらん ちりりりり
おらりてけわこお世に夢初のゆと也圓のさう王の位よ
一ゆとこ思合ぬと息十善の王位とゆて一糸并の
道よいつとせはけりすてよ内表とてゆせはありよい寛和
二年六月廿七日ゆりけりて月月のくまゆりてありよゆ

藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男
藤原相如の書信子 兼家公六男

とそらめく此詩の一句と神として入給ぬかの物故よかけの
しそありけきゆくも菅家のゆ遠りめくひくそ前の
昌泰二年の十月は善相公法り一の文章博士と
ありけり耐汝事と名く却く知く先見のめり
事とありけり世もきける事とて懇篤其志あり
これ賢意津のこくくく迷りぬれ汝の朝の云
離米之明不能親睦とて在仲尼之智不能知箇中相
そめきそりまきくあり事とて日月日誌考より
罪と最り事と名くさふありけり 仲尼の子 應神天皇
八年夏四月は百姓の消息とありけり
大臣武内宿禰と筑紫(遣)けり 孝元ノホホ 倉吉其美内の
宿禰奏申さくたつ見武内常より天下と望む心

今迄くくく三韓とてくく集くひくく不誦
と今く天皇はと遣して大臣と誦せり
二心なくくくもと以君人けり今何ぞ罪なき
死んやとなきけり時と名けり臣の祖根と云人
ちり其飛大臣よね似きり大臣と名く
其罪ぬき事と新中法(家)大臣よあり
とて罪すくく外て自記す大臣ひくく海
朝廷くあり家く天皇見事人氏推問して大臣の
皆中と知れくくく寵しけり
榮瑞氏かあり耐高祖よりありて
忠臣くも異他人をきくも耐く海く身くあり
くありけり一罪ありて連敗の恥と名く

① 法和主君の御代に於ては、善男卿の御代に於ては、
善男卿の御代に於ては、
心付より其御代に於ては、
と答より其御代に於ては、
息重の御代に於ては、
大門と號し、
間罪の御代に於ては、
より其御代に於ては、
わき色より其御代に於ては、
流しつらり其御代に於ては、
兄弟の謀計より其御代に於ては、

嵯峨帝皇子源氏始

良房

後朱雀皇子

河内守賴信子

後冷泉院少時法皇より源賴義鎮守府の將軍と兼
て貞任宗任と責けり、永業のあり、度々合戦よ
つしをきりけり、天喜五年二月、千二百余騎の兵と
殺し、御代に於ては、貞任の子余騎の衆と集
りて、金持河津の河橋柵より、是とせり、
たき、御代に於ては、
くれ申りけり、
大に修れて死者あり、
見つる六騎、長男義家、
貞任の京常花大宅元任、
とて責り、
津若井の鞍より、

かり是と思ふは我摺る家まきしんすりりこりた
君天子たふ無教おのゆと思ふ又さるむさくおぢれハ
理と云へしすくくねくね振舞と思ふ禁會の治門ハ
入しよりともききく願讓の橋りし相しよりも懇也其
勢すくともききよりく自任とわねうけりけりわくわく
山本後人清系武利一家の輩と川具しとすく一
万金騎の兵と康平五年七月將軍に加りともり
りて同九月十七日とも所川の楯しして自任と云
れよけり其時倉背重保島男千世童あり始く自任
と自任と切りしき者八人歩兵教不志残の家任家
任別任宗徒の輩十九人十金百とく陣人ともり
此中よこともをきり本ハ則任妻女館の修り時男

と終く云君任死す我一人生く何んせんとも成子
とつてきて高岸より此と殺く死ねる者流と流
しりり頼義の家ホ忠と天朝つとて名と遠近
あけりその存年へく白川院の府は内則明光
幕屋をりけりともりしと物依せりせられりとも
云放頼義朝臣の鎮守府と云く秋向城ハ何れ時
うす者ありゆし軍のおのこたも戸間法皇のこたれ
とも人奉祈幽ま也残事色ともりぬたしとも
ゆ林と終りせけし柞松と自あくと奉ハまきし人の
ともはよはよの貞心ありしす雷霜のそけりとも
とも色取守縁をりハ是と貞心ともあり也勤松ハ
年の寒よありしと忠臣ハ國のありしとも清安に

多
多

すよめやあつと共ありとらふ石中より水流わ平
ら共色酒の似う酒くをひらふりそき酒也るけく
えして共な日と走と酒くありきて又と共ふ時
帝此年とさししりて聖龜三年九月は共市入行幸
るそと酒境しりり是則王春の酒も天作地祇憐て
共徳と形すて感せさせ給ては美濃守もをされたり
共酒の如ふと共春光の滝と申且は信濃同十月は年
号と春光と改めしむけり

後三季此子此母左南公成也
◎白川院の御ありし僧と禁制せしむるなりと云ふ

は矣鳥類絶えたり共法食を僧の光を母と持する
る共母矣をもれた物とらりけり此れを求めり食
物とらりしやりねとありしと光の力添ふりり

今ハまのむ方ねくみたり僧の光をひくは求むたは
くく思ひもつたりつかり共くすも知ぬた自高
川色も能く衣もさしと共と共と共と共と共と共と
ちのさし禪と一二ねて持らたり禁制の重き法は
官人是とらめ取て院の如くわてあぬえ子納と問ひ
教生禁制せよのりて取れしつと共他と共と共と
以や法師の教し共名ときねしは光と共と共と
一ふしぬ智道と共と共と作念と共と僧派と共
くして申ね天下に禁制の重きと法来知不也此制
ねくた法師の教し此禁制の重きと他家考ら母とね
てんう共家一人の外とのり人ねし教しけ共と共
へて朝夕の食をやすしす家と共と共と共と共と

あれ心の「しんく」は「筋」の力場の中にも笑ひけきハ物とく
リす此一天の制よりして莫当の類物なる為すはよ
リりたり是れなきすけんこあは心のとらふをさし
りしに笑取物もあつた思ひのあまらふは河のさし
こ罪を行つて本業の内へはつとあ可道もす但
此取下の笑とハ放りた難生身あひしとゆりこ
これと母の許たつたこれとこなちさやうをり味とす
りて心やさうけれとさくしつともおれらんしすこれ
人海とわらす院関りて養老の志あさうぬと象威せ
させれとれとの物た馬車よつとけりせてゆりた
りしと本の「しんく」は「筋」の力場の中にも笑ひけきハ物とく
りしと本の「しんく」は「筋」の力場の中にも笑ひけきハ物とく

⑤武則天相と云随方天子と云りた道馬場の妙なり

「しんく」射きりしとて子成劫常して時とて打けりて
事とれとてうたれあれハ人つとて道す志とかくハ
うらうらとて同ぢれハりて道退るハ養老の笑とせん
とてこれあれれとておれとてわ候也わん(あれハ此心
のわりかきりうらうらとて中ぢれハ世人いしとて孝子なり
とて世のおもえあふのわさうりて徳太子用約の杖のり
あさうりせれけりと思入りけりや孔子弟と曾参
と云けりハ父のわりて打きりよ道すしとてうをさしけ
まハ孔子とれとて「しんく」は「筋」の力場の中にも笑ひけきハ物とく
事や「しんく」は「筋」の力場の中にも笑ひけきハ物とく
より人きもやあつた天母とけりて道あく孝終よん
たははえと二章と命をきり終の終とハ喪親章と

名も喪礼の儀式も注せり是と云ふ一十も
を教ふに孝養天子奉事所長をりて性生ののり
せり所解髪膚と父母を愛する性の始なり思徳の
高き事なり父母を孝へんは凡人のよき忠貞の戒と
つとむるは憐愍の思と治し父母親類の孝行の
心と常し居るはあつちり人となりあつちり仁親礼
智信の五常と礼と法とすへん又夫婦の中と
忠臣の道とよくよくきり如はは男の志とすへん
けさハ賢女の事よりなりつとて徳のよきあり
を教ふても貞女使の月とすりあきく子孫の内
同らりの類あまきり芳ゆえ世にすすめ道は徳
類多し

④ 唐の馬元正妻尹氏 男を成て後心移す事
ののりもきりなり物た歎のあまきり三年まで物
しめし今の男あつちりくたし送りなり 忠中妻同
く男あつちりられハ親のいさめとて人をも
みらん事と心しとて思く自身をわたりし
事記すに忠中妻の側は埋めとてまける加え
唐高宗二人移り湘水の岸にありて
保珠ハ思く高樓のりしとて身を
保す

⑤ 昔古師相思く任事り夫軍に随く遠くけり妻
けり子と果しとて武昌のふのふとて送り男を
よく思ひまきり男物にすなり
けり化しとて石とてなり共衆人のあつちり

まればよりより自信公八時年の第とくありしれ
兄と同意ししゆす天祥の四年と説けり其れ
しや高僧のゆかりれた彼の頼むりせりけり
しや西暦二年二月甲子此記宣の託の中よ西行
の付枚員信公在在なりとゆき家遠りと説く文よ
兄の謀計と同意ししゆす所長の悦と通りしゆ
懇懇と結託は家の子弟に捕政池すゆく胡家
しより子家志ありしゆと何そ子継せりしんや
のそしれきり實は十年のゆと同意の先郷定國若
根細長其末位してわす十年の延喜九年四月九日
たしして薨れ娘のたけ共此條末末一男八条
右左の傳息公の養年六年十月十日甲子十六を去り

二男奉流中納言教忠公天慶六年二月七日十八
よそがられた二男留少納言左大臣教忠公のそしゆ
左大臣と為り長く毎秋庭におく天祥とゆき
半よあわく候約と用たりしゆと六年甲子
たれた前納言ともお具ししゆすゆ飛法車斗とも
ありし料きりしゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆ
日陰の方よ少納言持と具ししゆす入るしゆすしゆ
すまししゆす其ゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆ
へし康保二年四月七日甲子とゆすしゆすしゆすしゆ
西二位とゆす贈しゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆ
ふのゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆ
人よとかりしゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆすしゆ

ふ糸棟梁ぬけりて白くうりて家の方へ一掃り
教忠はあも國に親類あれた世のまじく帰りに力及
ころきり

思ひのりさういのみりあつじいしねいあれあれ物を
此中因縁はあはれしにけりておとく集ふよき人
すし入り無事仇貞文の事申流侍従と申しまきけ
一掃もあり貞文消息とさういふさう成りあれあかひ
のさうあつてさういふさういふさういふさういふ
けりあつてさういふさういふさういふさういふ

昔せしころあつてさういふさういふさういふ
あつてさういふさういふさういふさういふ
凡接あつてさういふさういふさういふさういふ

と推さういふさういふさういふ

⑤ 近ハ平家の侍、能成之部、経房、云者福永よりあ
らうけり道く、津くけり色きりけり、ハ女流前日
能成中前日、威俊、田打きりあれた二人、平家より
けり威俊ハ馬斗と預り、さういふけり、経房ハさういふ
津のり方もあつたり、たかひさきとさういふさういふ
あつてさういふさういふさういふさういふ

一条河内教通、母、後冷泉女

⑥ 小野、皇族宮、二条、東洞院の、あつて、夜勝王、能と、あ
はけり、あつて、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ
位と、の、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ
津の、あつて、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ
宣紙の、あつて、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ

又そのときりし衣をいころれきりあれども此身いつくもお
りせありたり

① 元仇國流同寺と云山寺を件に僧と當國の王能相
かへ所ひしく部大般若書寫の大額を汝物成結縁を
命し用途ハ何れと云命し一傳書たるも流くか
す命し一書と云命し一書命し合用途を汝物す
不及能此僧善縁のう就事と信く自力と願し一
其切と汝とけし仍件の立聽し信し信しと
用途ハ何れと云命し一書命し一書命し一書命し
川流くハ先住長と遠原と云命し一願を信く信
とのあり時汝は風おきて汝信と云命し一書命し一書命し
能開く外集道信信と汝物す命し一書命し一書命し

紙と云つて流と云文字の口白の偈と云り此書
願取たり其文云

檀那不信故新紙還奉云經師有信故文字留靈山

按察使富元息

② 右兵衛借放行石澤と云人の流り信と云命し一書命し

るを清書の料幣と書けりと云命し一書命し一書命し
了して断幣とハ帝人家と云らるる文字と汝物す
る水黒と河と成と放行のよと云のありと成けり
と云命し一書命し一書命し一書命し一書命し
かくりと云命し一書命し一書命し一書命し一書命し
してと云の物と書と云命し一書命し一書命し一書命し
してと云命し一書命し一書命し一書命し一書命し
と云命し一書命し一書命し一書命し一書命し

事かられた侍も一人の物と成すきりあれます
しるべきものあるまじき世なれ也

叔女世と云ふより周の粟をうけりて共齒白
くろく成王よりのことと云ふは非虚くはせ
けりといふは戯言なりと大史の書の中ける孔子
飲と監采れ水く思ひ曾参車と勝舟の里人
めくくさすといふは思文字とけりよりよくて取の事と
えきせひちり是きくく道と作くすの事也和
橋や荀鼎と中書一官の監令と云ふれは橋
まふ物心へのつらりとて一車よの事なり
世と物小なりといふは虚言と云ふるの盗と
するといふ思直く思ひの物なりと云ふはつ

一むね一物中汝もいふくくものらねく欺と云
く直ありといふは物と云ふ力と云ふれといふ
心と云ふる人よ要事と云ふはけしむ海の時
のりて根をたす頼ひあり如世の人形八人同よ
と云ふも心先を敵鬼の国にたひと云物也はく
も可恥と云ふ可思と云

④昔季札呉王の信と云物りあり道と云徐君と云友
まふと云く物と云ふは徐君季札と云けるた刀を
いふ事と云ふれは朝と云といふ事なり季札は成
恨くあつと思けるは徐君の死也抑りて云ふよ
と心の仲と云ふはねと云ふ事なり徐君は徐
君早く云ふれ成と云ふは心中の契約の事なり

ふめい後塚とぬく共叙とうちらる是ハ伝士如きも
こころの同さうして産者の篇に書加紀前序の徳
り策の詞

秋霜を人号れ懸叙於蒼柏之煙

曉浪一聲元礼後禪於緑菴之月

或人左邊より力をと約束しく久しく医ううりち色
こころよめる

ちきりかきしるきりとも物とらや川うのまうきとる
楽天書ら事ら

一氣得仙生羽翼 衆嵐着之を羨也

可憐上天猶未半 忽作烏為口中食

是物とうやむいこころや又も候たは流くせら

り例一證是也

昔唐の塞翁と云者も賢く川う馬と持ちたりと
是と人よか一部とつひつ世と海に候けり
はと此馬のうさうけんいつらまなく其も
己中より人のうり難くうんとそ訪ひあれハ不
悔ともうりまそつゆもねるうけりあや一思
ちりて此馬同さなる馬とまぬわてまけり
ちめい事らまをさしあさうと喜を云くれ
又も候らひは是ともかあつて此馬あ
まを飼てさうりは作らるる子今も馬家
て候て志の財とつらかりまなり人目と誇りて
同とも不悔くまき氣色も不替つれなく同

い〜く〜さけりよ其法縁國軍おさうして其とあつり
所まけりふ國中けりあり者残多くわくは記ぬ此病
の子もふわつりよよりてめれはちれいさそいおれされた
命いさ〜りけり是情さ〜あり〜り付合まり今も
よき人の毎半うこまわく心浅く〜ぬ此病う心は通
つらわ〜るるあり内外典よ〜りふみけり人の心と
りつ〜き極也昔よりよき名と〜をて悪〜をり〜も
い〜く〜心印〜のの〜す也は新豊の老人が雲
南の軍と適とをりけるは自碎月とわけりけり也
此ハ自然の事也い〜く〜わ〜り〜事也

○前中書王亮キウ表賦喪馬ニウ老委倚イ伏於秋草フツ燕イ蝶イ
之公但是非於春菽イ菽イ之イ此年元武文云

趙栗と云人跡あふく人の残さる不の合珠一つ〜ぬ
とわ〜り其まひ多のさぬ〜り〜り〜り〜り〜り〜り
よひ返〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
まひ〜り又云揚震東萊の太守〜り〜り〜り〜り〜り〜り
とさ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
震よあふ震う云云と知也と知也と知也と知也と知也と知也
そは知と知と〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
憚り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
心也兼敬一聚金と云題〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
唐士路過敬不松 道家煙菴誤應統
釋尊者阿難と付ひ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
とせり〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

長谷雅 紀納言作

毒抱く作くまそくを在るなり其の如く人此金を
とれりけりぬるより責と爲て大に懼ひたり楊震
う曰初と初此意なり

④ 大納言隆國三男 大納言俊明々大六の佛と送るるに中を奥の

清衛薄の料へ金とまけりしを解くと匠つり

けり人共初と問われ法衛は主地と多く押領して

此を謀利と可殺者也其何に逃付使とつとらん奉

て定申御也依は是とねぬとの如く

⑤ 小野右大臣とて世に八領人右府とて著くより思は

けりい故に傍きりも能知者れい何奉り存ても其法

政をわきし誠の贖人と言ふるをせり奉るといふ所

くひく一節に虚際の様とてしけりわきまも

人交るに件かりて嘲り類もを後にあつて家と

送て移流せしむけり大納言の太のふすの如く走

りかるとけりやそも消さうけりてありしは終るなり

とやうくとあつりけり此書よりえあつりて人あつて

てよりけりて割てけりてより大六は形りけり成る

事と成て車よせよとておれけり柳相とておれり

事ぬし是より自贖者の衣類と帝より取らると

事おと感してりてねえなりわらうけりてハ等も家

一やらん奉は敵の力よりおれもあつりけりて戒

人けりおれをぬるるとおれハまつりわら走つたの如く

とさうりてあつりてあつりてあつりす大の校り災也人カ

とて是ときぬりて是より大納言の太奉りて

何よりりてう後よ家つと情むまきんともいふまける
其の事よふれとやうの御年泣うりけき八箇上質
人といふれとやうのうらむらむ鬼神の可畏な
ともん取られけりともやぬ正妻と不廻而精誠通於神
明と曹大家^{大選}家う東征賦よ書りとも思ふ命を死せともい
わさともて取れともんまきん共まひとすいさう
あう福を給よけり質の道ひともん本とあり
とも此殿をくより質人の一物のもれすす思ふの
ともいふ情人の物とてありとも

井沢長秀とく小野宮明質者ともいふはまきん
まのりともいふ元舜高湯文武周孔の徳とも顔孟程朱の
質たるとも自ら徳と宣ひつとも質と云れとも徳と云ふ徳の

あつたにやうなれとも質と稱し徳のあつたてりともまきん
稱するとも質のあつたともまきん本にありとも大舜の
大みその徳のあつたともそのまきんともいふありとも大舜の
ともあつたとも大舜なりともいふはまきんともいふありとも
あつたともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
まきんともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
ありともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
はまきんともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
まきんともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも

④園賦天をたけし野中をく勘くともいふはまきんともいふありとも
飛人な来貞高ともいふはまきんともいふありとも
頭をりともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
何方よりともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも
うれりともいふはまきんともいふはまきんともいふありとも

いふもたぬくもきむのいふもたぬくもきむのいふもたぬくもきむの
まきしむのいふもたぬくもきむのいふもたぬくもきむの

第七 可事 思慮

或人云人貴賤をいふす物の心川をききよりうま
けりし物とくうん家とわしし身とまの道とよく
あしし何事よけし身とあしし其家の業とふ
しし其方の業を相とけむしし思ふなり親の
あまやめしめのとれめとまの随ていれとけくわ
らんすりし思ふなりけむしまの事とあしぬ也又親も
あしししきあしきやふしし後の毒とくうす共
多とあししやまぬきよ不便をわししやめしものいふ
さのあまのいふし人の親はあし物をもはのせしむす
能しき業をうししきやまぬきよ不便をわししやめしものいふ
きりし親しとあししきやまぬきよ不便をわししやめしものいふ

之や、亦又書ゆ

志者道遠来者死乃知禍福不天

是ハ秦の李斯等も心ときくハ漢の周云等もふ
るまひと月あつら古調田頼の内の落句也かゝるも付
くも三界唯一心乃外は別法なりけりともまも亦天
又文殊の化身をもハいつ信せまへん他はまもまも
めしむれとつりくく形ハ取て用ひくことねす
つりす百はけりとも慮とめりくすんき也

河内国金剛寺ともや云山寺とも信りける僧の松乃と
と食市人ハお穀とくり孫たくりくねく食おの
せられハ仏人たねりともひあうくとも人とりけりとも
松の葉とねらふ誠ハくひおのせをりけんむくの類

ひらひのきとやうくおと年ハ成りけりけりも
わく成らりくもれハ弟子たもあハ仏人ハ成らん
とすり也くつねい云くともて内くもて身と起す
ひねくくけり取ハ成てとるをんと云く坊も何も
弟子たも合ら講とくりねし仏衣とまりく
お飛騰ハ物と望くもをくおまハお身ハ是よりおハ
くく物ねくとも年ハ秘死くもねまりあり水能
らりりと腕ハ付て己ハおもりす子同朋ハ所惜悲ハ
や及人志近市ハめくも集くも何ハ登り人んも
つりもきりけり此僧行ハのそりもきりあつる者ハ
とく登ぬ一殿ハ立た登りねんと思ハた近く先遊て
事ハ松人ともんせもんともね巖乃とすりりも生

おはさくともうて花人の習として心とくうりるんま
何の歌とあつてはるせうとせす心成まりして地
いしひとせしれんとして終る事しめらうと不
光せぬやうに推察して一頁に付て用念深しと人の
あまひさきこしん事終ると終る思急すへ共衆
しおのまきま

⑤ 白河院の院盛雪の組必也院一とむとせをかり
ましけりて或時若くは中よりよりうきとれて階
上達部殿上人の先づとくまうとるうちうん
あまのありあつれりし能力教条衆とんれし
沙車さしとせく人に深きとくありあり教条
ありあやう雪のうしはくはのれと能くしとる

少年の形もんと思く小野宮古伝宮の時
あつたれは徒者とせらせく少年すては成定
小のまゝとせりんとしとらちるに宮の女房の中
し紅うすやうとらちるに共衣せぬより
とく今と之間はあせし宮の作こもけりしと女房
中より院入せありしと少年あつてはえ若くは
ねんしとあつた雪けらんせんは内へ入せ終りて
しと作しとあつたはと之間は二具つてありし
けりしとせく少年あつては雪のうしとせりし
小野の宮とけりしと上人上達部殿上人つ
しまつる望古伝宮のあつては作あつた人つ
て門のあつたはとあつたは少年といふと

足利今中つふ御榻をてて座をよとけらんすりぬ
寝殿の南向く紅の御心とて同じあけまてり物ようけり
まうけられをけりそくゆ使すりぬと臺の上七斗
ありの御書とてあけまてり物御心今御書すぬ
こんらこのゆ舟、張とてあてりて餅とりのとをり葉
とてまてりてとてとてつたてて回御心とてりてま
らまをりてのよのりてたのよの座とて雲のよ
くまをりてくけりてとてとてあてりまてりて
回御心とて御書とてあてりてとて又御心とてつた
く座の御心とてとてとてとてとてとてとてとてとて
すまは御書とてとてとてとてとてとてとてとてとて
御書とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

おろしとてのよの御心とてとてとてとてとてとて
まてり御書の御心とてとてとてとてとてとてとて
おろしとて御書の御心とてとてとてとてとてとて
持てて座の御心とてとてとてとてとてとてとて
あまあけりてとてとてとてとてとてとてとてとて
まの座の御心とてとてとてとてとてとてとてとて
人ともあてり御書の御心とてとてとてとてとて
まの座の御心とてとてとてとてとてとてとてとて
雲の御心とてとてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
入内の御心とてとてとてとてとてとてとてとて
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

返文の返事やねとといえ入るおぼろけけきハ結成男が
れくよねの時此ととせめゆえけるは共祝しとうくお
りせきりあり絶くくく成る人係よ青信きり
心も心ねくすあわさくくくくあさくくくくあさく
心りす人あさくくくくくくく成るん人の係よあさ
んよけくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
共と例の人あせすの涙共祝成るあさくくくくくく
是ハ情もりきりあさくくくくくくくくくくくくく
らんとしてねくす人くくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

必あひねさく半もあれた心うく事也ねお方うやハ
ま言ちま云實心くの女侍質門流の姉妹也女流よけま
せくちね流しと時く系終ちりうた固く入流けけるな
ね家よ菊苑のきくまらけけると流よりなれはまのせ
らりくくくねくねくけくくくくくく

九重よ初ひねた菊の流のこのまらくくくくくく
とありけけるくくくくくくくくくくくくくくく
人ハ下けるは貫くく娘の着よ白くくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

物ねまにくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

門佐佐基俊佐胡所行方よりして沈思の間感氣の受てり

まゝとて敬服祭うねと高巻と詠と多う頸伸入道

是を聞くとさうと馬ゆと云者あるか和弁難成る也

歎けり早く此句とぬく元句と案すへくと数層也

まハ元とあましく此とらとす披誦の付下筋少く先

此弁とよとあつる間金吾大と具さむる字を入道ひそ

くふ知ふまは金吾の平海するを因て馬ゆと赤く

よとまよけれといふれけきと深石の氣をとりむ用な

るんさうや

匡衡齊名作文産とて晩寺鐘色流水赤く一句と作

念きらとけり此詩の事とて他つぬの事一節をわ

らうりていふんをよめわらすま念すへくと見

ゆりうともあつ

⑤齊名大陽乎大江付魚子以言と賦とまあり付秋末

の詩境と云本と作とらとて以言文章と書と案と案と案と案と

のる景詞海船艤落葉色と作をるありとひそり

後中書王と云せありありと白字と知也と作とらと

けく白的景紅葉色と書とて考句と定め其後齊名

病重りりける時みと病治され恩問の旨忌味十四但白

字半一不可忘却とて申ある

文付らと東走草中仙と云題と詠と作えさうりある

衣とゆとらとと初らとけり保流素ととと度如何と

云あれは不及力不滞の度あれと書けり後草案

とらとれ

蘭蕙苑嵐摧紫後 蓬萊洞月照霜中

と云詩を是已よ考ふ也何歎然へきと云問之亦此詩を
如く亦く世に秀造自作の事いひて人々討ひえぬ
なりやうの事む可思ふ也

○市堂入道殿法成寺を仰せ給時毎日御せ給法
白ふと云しと創せ給けり此依ふ事と云り或門を
入せ給りしとすよ亦よ進くまらぬらりては是も
まよふとせ給くはらんすらぬ事なりおろりおれハ
程歩も入せ給ふな亦世のらんといひて此れを
いひてもやうと云へしと云へしと云へしと云へし
く忽々晴明と云くも細と作らるる事なりと云へし
思惟する事ありと云へし君と呪咀しと云へし

大膳方実宗陪政村子

厭術の物と道と埋と越とをきんと構へ侍るなり
以運やしと云へしと云へしと云へしと云へし
より小津道の物なりと云へしと云へしと云へし
大雲と云へしと云へしと云へしと云へし
をりと云へしと云へしと云へしと云へし
しと云へしと云へしと云へしと云へし
ハ極めたり秘事也晴明の外知者なり但道道摩
法師不為れ共一人と云へしと云へしと云へし
鳥の形を思ふと云へしと云へしと云へし
成と南と云へしと云へしと云へしと云へし
伝不し可知と云へしと云へしと云へし
分てり方と云へしと云へしと云へしと云へし

内上ありぬ仍按ると求る可く先僧一人を即擗殺せり
清と因りて道摩堀川の右府の諸をて術を以て守
中中もれた罪とありてを中因擗たる此のつりす
但此のく此術を以て術を被りて是運の法を
直の償く切りてますよりて此能てのうれを以
りたり

元中初改聖子

① 隆禪律師按察大納言隆季法律師導師と坊人
かつてをりて敷居一人来りて大和國の人成るる日言
をりて又食物を以て之敷居はよらん食物あてきひ
以て云もれは食物と云居りてやうあり敷居入て門
を叩く者ありて使麻使也と云其居りて門く溢耗の少
法よかりてとて也ゆりて敷居はよらん功ぬ是よりし

後居と云居りて相侍候と敷居とく判官居りて者
来りて又門を叩て此居を法と云居りて入る
く隆禪自對面と云居りてとて判官と云居り
者隆禪と云居りてとて刀と云居りてとて脇と云居り
動と云居りてとて殺と云居りて坊中の人をと云居り
其後よぬと云居りてとて念と云居りてとて資財雜物若干
運取て馬十余疋と云居りてとて居と云居りて隆禪と云居り
のせと云居りてとて西栗田の山と云居りてとてきゆりてとて居
りては素莊表王子帝高漸離と云居りてとて鈕と云居り
りては素莊表王子帝高漸離と云居りてとて鈕と云居り
隆禪と云居りてとて居と云居りてとて居と云居り
あひかりてとて居と云居りてとて居と云居り

楠津園兒屋寺と云布七斗斗なる法師の一人おきて
清つき堂のそこの住持の家のおけるお宿りてこ
そまらじよあり二三日もあれたれんもゆるさるれんとの
住持あやしそらつたる人のいつくしけりそと問あれし
旅人の法師しやうりていつくへまらる也し
男定しる事もねしそら男捕六國志うし
云布ふらう世中も住しやうす田地不領ねもあまき
物くはら毒とそ女の心くもあしゆるさるそ
くもそんえしゆるれねては是れは是れ清
ねとそもけりきまのそらやと云此住持内もそめん
思く山まらるほら十日もゆるそく此法師ねね
さしすくそそあれあまら思くち中あれめく

らしけきしよしねし法師のそらまてち中とけり
つるしとあはしそらあ結去あお馬帽子
きり男の使者二人斗具しそらかる来く此寺
より老らる法師ねもあまら事やそ云あれ
かく清梅の傍ねり所よしそ法師の日来まのそ此
ねと外らそそ此男よりて打んそ云やう此法師は
家天とそね親ねく老ひみそ家りそと此あ
走とそねらり親人ねと養ふましそ身そとね
らねよ心のあしゆるねよりおこそそね不思議の
ねしとそい云よかひねらへて葬送はしそとそ
いねり方と成く乗馬者とねくはあ斗斗具来て
ひしめきとれ共寺中此犯人とつとれ八坊大をそ

人もうおぬるうもや此僧は物よりのせくもそいふ
と思ひしよよめくられ此のつらき心もたよりお思
後世と思く葬送の事よとるまいつらき心ハうこ
うそ教くよおらうくもやぬくいつらき心ハうこの
くつけおきうたりはねおとく念佛とて其ま
まれよこのとらうくもて死人と理むゆとあよりけ
ゆいしききとらう也

⑤中法より一き人の子とて禪師の君をたり孝同行
とせそ何とねくつらき心ハうこのつらき心ハう
ありしそ師のりよりも常よ善信もせず乳母も
おもれはす心もたよりもたよりといふありもん賀茂乃
あ日けりけりこの娘よ云よりく師のりよこのつらき人の

しとらうくくむくよせすすけりしつらき心ハ
おもれたわもより常よ善信もれはす付る心り
てつらき心ハう世中物けりくつらき心ハう中より
のちも上り半もけりたれは中中れ上中あさ
よあさ半もて大半けりけりけりやうく年のこ
てうも成ぬまて此禪師のりよ何とねくま
れありくつらき心ハうこのつらき心ハうこのつらき心
をり侍の歩も入く此禪師の君成りくつらき心ハ
らくもたれし縁のつらき心ハうこのつらき心ハう
くつらき心ハう也養老あそつらき人の形あとりてまいつらき
はうつらき心ハうはあはれしつらき心ハう世中
あそつらき心ハうのつらき心ハうこのつらき心ハう

僧如くと知人よそをわらへてまさるる約まのせよ
とふ也つとく一知不二三ありて一なり一信一と人
とそも切り一まきすの極よん者もひく一此也思て
とらねる馬丁一川をきておる也つと切り一め
すといふ此禪師年法心中一願川のふと也て
此佛津のゆゑなりとれ一思平路れ一はく
も作一りまきとて云あれはあはれとあはれと
せりん事一人目とつと一をり思一まきん此也
ひくまのせ十日斗れ一あり一まきと共なとい
とそやそと也つとけふもゆぬ一と一思
まのせん人目つとつと一とて云あれは
思平も後よ思つとやうとまきと一とつと云禪師の云

思平より法ありとせんと思つるとまきとて御あり
つと斗車りつと人途一とせと思まき一は思せん
事まのれ一とて思とてまあすの極一約束一と
此侍御ぬ宿のさ乃僧と此本と後とれハとて
ま平一信と一思平と一思平ハかくや一まきと
まのまを一思平藏れ一思平と云あれハ思平
及りぬ思平也一思平一此類一思平と云あれハ思平
つとと侍を思平とれハ思平ハ思平の事思平
と一思平一思平一思平一思平一思平一思平一思平
て思平思平一思平一思平一思平一思平一思平一思平
かて思平一思平一思平一思平一思平一思平一思平
思平一思平一思平一思平一思平一思平一思平

女四のそくおゆえもれい

佛のこゝろをさす神さまけりやに雲にぬる木の葉
禅師も人の子なりもれいかりぬるけりふ縁におゆ
んそくさくくはふあつとまと思歎あり

貴舟河志まどさる白波のよるりもねまどさる
とそよさけりまどさるなまどさるのた九日のまどさる
けりり車よ難色才細きしりやうそく此侍具しそ
方ちねくやと入まると禪師けりまどさる車よそくそ
けりまどさるまどさる人の非あねいおゆらあるけりま
とそくさくくはふあつとまと思歎あり
ひかりしつねいあまきまのまどさるまどさる
と人あれよけりまどさるまどさるまどさる

傾かきまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
思て此家の論文ねく質よまどさるまどさる人の物とあつそ
ゆきまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
正月よまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
此家の口もまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
ぬふうつが何来まどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
あひする人もね一年うまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる
まどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさるまどさる

とあれはちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
とハ此玉とちりり車ねくくしと珠とをねくく後継とい
まの色とねくくしとけつきの人よあつさ
時よ素更にゆりしとけつきの人よあつさ
方々風情相似たり

⑤漢高祖の臣張敖房黄衣を兵書ゆへくまなをね
て漢王とけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
帷帳の中よりちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
車乳子房よあつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
師傳く登くしと書りすくしとけつきの人よあつさ
牛と放くしと廻鶴つとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
惠主蜀の國とくえんくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ

あつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
金とまくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
牛とちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
五人の力人よあつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
形り通るし成ぬ素相張儀とつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
蜀國と打ねくくしとけつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ

⑥近江唐よ徽宗と申帝ありしとけつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
少時ねくくしとけつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
云々よけくくしと佛記と書りねくくしとけつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
切ちりりこくと人の心あれりあつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
物とあつちりりこくと帝と書りしとけつちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ
と王宮よ入て室とちりりこくとめくくしとけつちりりこくとめくくしとけつきの人よあつさ

ゆるぬさうりらうひあゝる言ふに折れぬよ
あり善悪ともうひて交成をんはいおぬけけ
ぬ所の流し成るやのさすきくハ事なきはま
ちね一戯ともおきてさやね一り言也花や家川
うらん人のあやしうんきめよ今せうきんをむ事
又若一うらなふおぬけのちハ福永ち相國後門
いしーうりける人也ありあゝくまゝ一き事なき
た共さの戯とも一つるさハはうまゝひもあ
うらぬさうりらうひつらぬあやまるを一物を打らじ
あゝまゝ一き事なきとまゝなれちひね一とあゝさこ
あゝとまゝとすたをさ流しお侍たお衣のすそ共下
うあせとけいさうらわねくう朝い一たきハやせうぬ

あゝと一おらうりねをせけらばはも及らぬ末乃者なき
ともうさうあゝまのりのるおとハおとくすさる也
とめとね一給あれいし一さ目よと心よあゝさう
けしとあゝりけねの結さくもゝある類ひ思付あり
人の心を感せ一むハ是なり又贖人のりともおえ
をらりのありあり

⑤ 九条氏於公頼頼のりとおあるは君達年ハ高て

近米司と仰け流しある者一とささめさ奏一
ぬくねと入流しとまぢやて年ハ高くとハありん
何奈近米司のときまゝやらんお衆うあゝけ行方
に流しれし一ぢうふやきねし一細くねん次侍なり
養一ゆる一このゆゑ一さる事おとまんてさ

いりやうのまゝみぬこと朝にいさゝか
と回終つて言のやうにさうさうと
つらとゆけうらうらと聞下りて
いりんとてぬきぬきとまぬ
と思ひよよ木の枝の言をゆひ
とあやまらしたまらうらうら
とくも昨日の作の言やうに
よりいりうらうらとさうさう
おとてゆきとゆきとゆきと
まゝと出て言のまゝとゆきと
ひきゆつとゆきとゆきとゆき
けたた言のけしとゆきとゆき

まゝと出て言のまゝとゆきと
とらうらうら

⑥ 白河流馬相ありけり
岡たりまのせめきとゆきと
葛頭ひきゆきとゆきと
其外五位の言をゆきとゆき
とゆきとゆきとゆきとゆき
の言をゆきとゆきとゆきと
こしとゆきとゆきとゆきと
わくはとゆきとゆきとゆきと
定年未の言をゆきとゆきと

十訓抄中卷若文政十二己丑冬十月二十七日於砥用郷
重見山中寫之

中村直衛

七十九葉

